

披講法と和歌の解釈

——『水無瀬殿恋十五首歌合』の判詞をめぐって——

田 野 慎 一

はじめに

『水無瀬殿恋十五首歌合』は、建仁二(一一〇二)年九月十三日に催され、十五の恋の諸相を後鳥羽院・良経・定家ら十人の歌人が競い詠んだ歌合である。当座での評定は衆議的な面が強く、また、俊成を水無瀬に召し寄せて判者としている。

本稿は、その『水無瀬殿恋十五首歌合』の「故郷恋」、

四十五番 左 持

定家

つれなきをまつとせしまのはるのくさくちぬ心のふるさとの霜

右

雅経

人ふるすさとをまなにかいとふべき我身ひとつのうき名なりけ

り

左哥、まつとせしまのはるのくさとは、をかしかるべきか
ときこえ侍しほどに、くちぬ心など、いかにいへるにか
心えず侍り。右、さとをいとひてこしかども、といへる哥

の心によとみえ侍れど、愚老思わきがたく侍れば、持とす
べくや

(笠間影印叢刊37「水無瀬殿恋十五首歌合」日本大学図書館蔵
親長自筆本。適宜、濁点・句読点を補った。)

の番に注目し、左の定家の歌とそれに対する判詞のはらむ問題を明らかにしようとするものである。

—

俊成が、「をかし」と評している部分は、

(題しらず)

わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしま
に (古今 恋五 遍昭 七七〇)

(新編国歌大観。以下、和歌の引用は特に断らないかぎり、同
書に拠る)

が踏まえられている。「拾遺愚草抄出聞書」では、

わか宿は道もなきをあれにけりつれなき人を待とせしまに春過
て既に冬もきたる由歎古郷とはかくせしまに年をかさねたる由
なるべし

(未刊国文古註釈大系 第七冊 帝国教育会出版部 昭二二)
と注されている。

そして、俊成は、第四句「くちぬ心の」を「いかにいへるにか心
えず侍り」と批判している。

猶、この第四句には伝本間に異同が見られる。流布本のうち群書類従本などでは第四句が「かれぬ心の」で、判詞でも「かれぬ心の」の形で引用されている。「拾遺愚草」には「かれぬ心の」の形で収められている。とにかく第四句はどちらの場合でも俊成によって欠点を指摘されている。

それでは、俊成は第四句のいかなる点を批判しているのか。この問題を考えるために、異本の判詞を検討することから始めたい。

二

「水無瀬殿恋十五首歌合」には、先に引用した流布本のほかに異本が存在し、判詞などによりかなり相違がある。異本の判詞では「やさし」という俊成があまり使用しない評価語が多用されていることから、俊成の判ではないらしく、後鳥羽院とも六条家の歌人とも推測されている。

異本の判詞では、勝負や評価のポイントが異なっている場合もあるが、当該判詞では、

左哥、末句のはじめ此作者講師にあらずはあきらめがたし。かれぬやどかすなど云る古哥は侍ども、其はしもにて疑无見る。

これはたがはぬやう也。右も古哥には侍共、始の五もじ恋ねがふさまにはなるべし。持と可申。

(笠間影印叢刊38「水無瀬殿恋十五首歌合」有吉保氏蔵本。適宜、濁点・句読点を補った。)

と、下句の始め、すなわち第四句の表現を問題にしている。

猶、異本の方でも、第四句は「くちぬこゝろの」(有吉保氏蔵本)・「かれぬ心の」(内閣文庫蔵 二〇一・二三五)と、どちらの場合もあり、その第四句が「此作者講師にあらずはあきらめがたし」と評されているようである。藤平氏の指摘のように、この部分は確かに意味が取りにくい。

藤平氏は、「くちぬ心の」から「かれぬ心の」へ改訂されたとし、「くちぬ心の」の形では、「下句の歌意が不明確で、定家の意図は他の歌人には理解されていない。そこで「離れる」と掛詞になり、

より恋的要素の強い「枯れる心」に改作したと思われる。」と述べ、講師が単に歌を読み上げるだけの役割であったならば「作者講師にあらずば」という異本の判詞が理解できないことになる。

むしろここでは読師の役割を当てると、歌が披講された段階で講師であり、読師でもあった定家自身が自作歌を改作したと考えられまいか、他の歌人であれば、一度懐紙を提出した後で改作することはできないが、作者が講師であったのでその場で改めることができたとも考えられよう。

と推定している。ただし、当座で改作できたのが、講師であり読師をも兼ねていたという定家のみなのかという点には疑問が残る。もう一度歌合における講師の役割を確認しておきたい。

歌合の講師について、『袋草紙』には、

次講^ニ和歌^一。先左読師取^レ歌開^レ之授^レ講師^一。々々読^レ之。次方人^ニ学^レ声詠^レ之。…左右講師陳^ニ是非^一事無^レ憚^レ也。

(小沢正夫氏ら 『袋草紙注釈 下』 塙書房 昭和五一)とあり、また、『八雲御抄』には、

依^レ召正^レ勿參上^一、懸^ニ膝^一於^ニ円座^一正^レ不^レ居。又前^ニ円座^一出^テ見^ル。苦。読師隨^レ重^テ頭^ニ微音^一二句^ヲ、読也。…凡講師、読^レ歌外、不^レ言、是故突也。而承曆、師賢、通俊少々陳^ニ是非^一。可^レ為^レ例敷。…

(『日本歌学大系』別巻第三 御精撰本)とある。

講師とは言うまでもなく、歌を披講する役割の人であり、当座の人は、講師の読み上げた声によって歌を享受した。そして、その読み上げ方は、「微音^ニ一句^ヲ、読也」と、微かな声で、一句ずつ読み上げた。定家の『和歌秘抄』に、

読^ニ和歌^一之時、先一首ヲ見訖^テハ得^レ歌心^一之後、可^レ出^レ音也。一句ツ、切声^ニに^テ讀^レ上^レ之。読師以下同音歌^ニ吟^一和歌^一之間、無^レ懈怠^一之気色^ニ而候。…

(『日本歌学大系』第三卷、ただし「和歌会次第」の内)とあるのも同様であろう。

ここでは、「和歌秘抄」の「読^ニ和歌^一之時、先一首ヲ見訖^テハ得^レ歌心^一之後、可^レ出^レ音也」の文言に注目したい。これは、講師の心得として、作者を除く当座の人々に先んじて、披講の前に一首の意味を理解しなければならぬというのであろう。講師にしかるべき人が任じられる所以である。異本の判詞の「作者講師にあらずはあきらめがたし」の部分は、定家歌の第四句は作者である定家以外には明確に意味を捉えにくく、他の人が講師を勤めれば一首の意味を見極めることができないというようなことを意味しているとも解釈できるのでないか。第四句の意味が作者以外には伝わらない不完全な表現であると指摘されているようである。

その第四句のいかなる点に不備があるのであろうか。次に異本の判詞の「「かれぬやどかす」など云る古哥」の文言を検討しよう。

四

「かれぬやどかす」という句を含む古歌は、藤平氏も言うように検索できなかったが、この部分を「ぬれぬやどかす」として引用する伝本がある。もしそうだとすればその歌は、

鷹狩をよめる

あられふるかたのみののかりころもぬれぬやどかす人しなけ
れば
(詞花 冬 長能 一五二)

であろう。安易な誤写説は慎むべきだが、この場合、始めの一字以外が全て一致していることや、定家歌との表現技法上の類似点があ

ることを合わせ見ると、「古歌」とはこの長能の歌であらう。

長能のこの歌は、諸注の指摘通り、惟喬親王と業平らの交流の「コマを描いた『伊勢物語』八十二段の紀有常の歌を踏まえた歌で、「このうた此集の内秀逸十首の内也風流なる歌也」（中世文芸叢書『詞花和歌集注』広島中世文芸研究会 昭四一）とも評されている歌である。「袋草紙」にも逸話が収載され、俊成の「古来風体抄」、定家の「八代集秀逸」、後鳥羽院の『時代不同歌合』などにも採られた著名な歌である。

長能の歌の第四句「ぬれぬやどかず」は、いわゆる句割れで、一首は、上からは「狩衣が濡れた」と続き、その理由が「宿を貸してくれる人がいないので」と下で明かされるという作りである。ただし、「ぬ」を完了と打消両用の意味にとる見方もある。その場合、「あられが降る交野の禁野で狩するその衣は濡れてしまった、濡れない宿を貸す人がいないので」（岩波新大系）となる。

一句ずつ区切って披講する場にこの歌を置けば、第四句は先ず、「濡れない宿を貸す」と解釈されよう。八代集の中で、一句が「動詞（下二段活用、上二段活用など）＋ぬ＋名詞＋」の構造を持つ歌を調査し検討したところ、殆ど全てが打消の意味であった。

ところが、最後まで聞き終えた段階で、「濡れない宿を貸す人がいないので」では「首全体の意味が不完全なことに気付く、そこで第四句が句割れであることがわかるのである。異本の判詞の「其はしもにて疑无見る」はその呼吸を指摘したものと解せよう。

それに続けて異本の判詞では、定家歌については「これはたがはぬやうなり」と指摘する。判詞の文脈から考えれば、定家歌では、第四句の句割れが結句が披講されても意識されないという意味になるようである。

歌合の判詞の「たがふ」の用例の中では、

三十六番 暁雪 右（負） 内大臣

朝戸あけてとほちのさとをながむれば雪のしたにぞ鳥もなくなる

：右歌、遠ちのさとなど、眺望むねとして聞え侍るほどに、鳥もなくなるこそ、上下殊にたがひて聞え侍れ

（正治二（一一〇〇）年仙洞十人歌合 七二）

八百七十三番 左持 前権僧正

あけばみよ、もの山辺の雪の色を衣手さむししの、めの空

左の姿詞いと宜くはみえ侍ど、しの、めの空にあげばみよと侍やたがひてき、なる、方も侍らん。よもの山辺の雪の色もみえわかるべき程になりぬとにこそ侍らめ。：

（千五百番歌合 一七四四 判詞は定家）

（引用は、有吉保『千五百番歌合の校本とその研究』より。以下同じ。適宜、句読点・濁点を補った。）

などが参考にならう。前者は、上句と下句とが掛け離れている点を、後者は、初句と結句の表現がやや結びつきにくい点を、「たがふ」と指摘している。どちらも、句割れについての指摘ではないが、

これを参考にすれば、定家歌の「くちぬ（かれぬ）心の」の場合、句割れが意識されないことを「たがはぬやうなり」と評している。と解釈することもできるのではないか。

先にも触れた通り、「八代集」で定家歌の第四句の構造と同じ句を持つ歌では、殆ど全て「ぬ」を打消の意味で解してよさそうである。例外として、長能歌のほかに、次の二首がある。

あふみぶり

近江よりあきたちくればうねののたづぞなくなるあけぬこのよは
（古今 大歌所御歌 一〇七一）

たなばたの心をよめる

七夕のあまのかはらのいはまくらかははしもはてずあけぬこの夜は
（千載 秋上 俊頼 二三九）

古今歌は、上句に「朝立ちくれば」とあり、「あけぬこのよは」は明らかに倒置であることが分かる。千載歌でも、この古今歌の表現が損取されているとみてよく、解釈が揺れることはないだろう。

それに対して定家歌はどうであろうか。定家も、第四句を「くちぬ（かれぬ）／心の」と句割れにして、それぞれを上下に接続しようとする意図しているであろう。その場合、「冷たいあの人を待っていた間の春の草は朽ちてしまった（枯れ、あの人を離れてしまった）。心は年月を重ね古くなり、故郷に降った霜のために」という意味になるろうか。

ただし、この句割れは長能歌ほど明確には意識されないようであ

る。

「古今和歌六帖」第六の「春草」の歌には、

はるくさのしげき我がこひおほうみのかた行くなみのちへにつ
もりぬ
（三五四四）

野べみればわかなつみけりむべしこそかきねのくさも春めきに
けり
（三五四五）

はるくればのべのまにまにおひしげるちくさに物をおもふ比か
な
（三五四九）

のような歌がある。春の到来とともに萌え出で、茂りあう草が歌われ、また春草は物思いの激しさの喩えになる場合もある。

先に触れたように、定家歌の場合、第四句「くちぬ（かれぬ）心の」は、「朽ちる（枯れる）ことのない心の」と披講の場では先ず理解されるが、それと春草のイメージは結びつきやすいと言えよう。恐らくこの定家歌の表現を損取したと思われる、

三十二番（寄弓恋）左持

あづき弓すゑのはらはるのくさかれぬこのころの色をみせば
や

兩首、依無殊得失、為持（判詞は定家）

（貞永元（一一三三）年光明峰寺撰政家歌合 知宗 六三）
は、「春の草のように枯れない、（あなたから離れない）心の色を（あなたに）見せたいものだ」という内容で、第四句は句割れではないだろう。

それでは、定家歌の下句に、第四句の句割れを意識させるようなものがあるだろうか。先に述べたように、定家の意図としては、結句の「ふるさとの霜」によって「春の草が朽ちた（枯れた）」と、句割れを意識させようとしている。しかし、長能歌のように「…人しなければ」と明確に理由が述べられないので、「冷たいあの人を待っていた間の春の草のように、朽ちる（枯れる）」ことのない心のまま時を過ごして、故郷には霜が降ったことだ」と、恋人に飽きられた女の荒涼とした心境が歌われているとられかねまい。定家歌は披講の場では、長能歌ほど読み手に意図が伝わらないようである。

さて、異本の判詞の「此作者講師にあらずはあきらめがたし」の部分には、作者である定家が講師でなければ、講師として歌の意味を捉えることが難しい、すなわち、定家歌の意図が他の人に明確に伝わりにくい点を指摘していると解したが、次のように解することも出来るかもしれない。

それは、作者である定家が、講師であることを利用して、本来ならひとまとめに読む第四句を、「くちぬ（かれぬ）」と「心の」の断絶を当座の人に意識させるため、たとえば間にポーズを置くなどして、一首の意味を明らかに伝えることができたという解釈である。

この場合、俊成の「くちぬ心の」などいかにいへるにか心えず侍り」との評と矛盾するわけだが、その場合は、俊成が、定家の意図を理解しつつも、やはり表現の無理な点を批判していると解釈することもできよう。

五

もちろん、句割れについて俊成が否定的な見解を持っているわけでは決してない。この「水無瀬殿恋十五首歌合」でも、

九番（夏恋）右（負） 家隆

ときぞとやよはの螢をながむらむとへかし人のしたのおもひを

：右の歌、とへかし人のしたのおもひを、といへる、又直しきを

十六番 冬恋 左勝 雅経

しもははやふるのなか道なかなにかれなで人をなにしたふらん

：右、ふるのなかみち中中に、などいひ、かれなでひとをなといへるすがたをかしきにてかちにまかりなりにしを…

(三三)

五十四番（関路恋）右（負） 有家

これも又関もれとやは清見がたみせばや袖の浪の月かけ

：右、みせばや袖のなどいへる、宜しく侍れど、…

(二〇八)

などのように、その表現を評価している。問題は、先の定家歌のように、句割れであることが曖昧な歌である。俊成や異本の執筆者は、定家歌についてはそのような表現を否定的に捉えている。

聴覚的に歌を享受する歌合などの場では、講師を除けば、当座の人は講師の声を頼りに歌を理解するのであり、講師の披講の仕方

よつては、歌の真意が伝わらない場合もあったであろう。逆に、披講の仕方によつて作者の意図が明確に伝わる場合もあったのではな
いか。今回の検討はその一例になろう。

当時の歌人たちが披講の仕方によつて歌の意図が捉えにくくなる
と意識していたことは、次のような歌合の判詞にもあらわれている。

八百九十七番 右 (負)

通具朝臣

霜むすぶ袖のかたしきうちとけてねぬよの月の影ぞさむけき

…右、袖のかたしきうちとけてねぬと侍を、五文字のかずにつきてくわしくよみつゞけぬ程は、かみにことほりたるやうにぞきこえ侍。

(新古今和歌集 冬 六〇九にも入集)

岩波新大系『新古今和歌集』の脚注では、この歌について「普通に詠吟して上句で休止すると句意が通ぜず、その点を右歌合(千五百番歌合 稿者注)の判で定家は難じている」と記している。『千五百番歌合』は実際に披講されたわけではないようだが、定家が判詞の執筆に際して、披講の仕方が歌の解釈に影響を与えることに留意して批評しようとしているのは明らかである。

おわりに

この時代は後鳥羽院によつて歌合や歌会が数多催されている。こうした披講と歌との関わりについては、岩津資雄氏の論に詳しい(『歌合の歌論史的研究』第三章「新古今調と披講式」 早稲田

大学出版部 昭三八)。今回の検討は、披講の仕方が和歌の解釈に影響を与えることを指摘しているのではないかと思われる判詞を指摘したのみであったが、それは講師の役割を具体的に示す一例ともなりうるものであった。今後、講師の役割については注目していきたい。

(注)

- (1) 有吉保「水無瀬恋十五首歌合」解題(笠間影印叢刊付録)、藤平泉「水無瀬恋十五首歌合考——歌合の場と改作の例——」(『神戸女子大学紀要』二五—一卷〈文学部篇〉一九九二)
- (2) この番の判詞に関しては、有吉氏の調査に拠れば、流布本の中にも、異本の判詞を併記するものがある。注1掲出有吉氏解題参照。
- (3) 注1参照。
- (4) 注1掲出有吉氏解題参照。
- (5) 諸説については、渡部泰明「ふるまへる」姿をめぐる——俊成歌論と説話の接点——(『国語と国文学』平五・一)に整理されている。
- (6) 谷山茂氏も、『歌合集』(日本古典文学大系 昭四〇)の補注で詳述している。

——たの・しんじ、広島大学大学院博士課程後期在学——